

# こころ

発行  
城南区  
人権啓発連絡会議

事務局  
城南区役所  
生涯学習推進課  
TEL 833-4044

## 第25回 城南区人権を考えるつどい

### どうして、まわりとうまくいかないの？ 発達障がいの子のピアノニストからの手紙

野田 あすかさん・野田 恭子さん

平成二十九年七月十三日(木)、野田恭子さんの講演と野田あすかさんのピアノコンサート「どうして、まわりとうまくいかないの？」が発達障がいのピアノニストからの手紙が城南市民センターで開かれました。これは城南区人権啓発連絡会議、城南区役所が主催したものです。

当日は、会場の五百席があふれるほどの大盛況でした。  
あすかさんは、一九八二年、会社員の父と高校教諭の母・恭子さんの間に生まれました。四歳より音楽教室に通い始め、ピアノニストを志すようになります。しかし、子どもの頃より人とのコミュニケーションがうまくとれず、



ピアノだけでなく美しい声で自作の手話歌も

二十二歳で発達障がいとわかるまで、家族、本人ともに「どうして、まわりとうまくいかないの？」と悩み続けました。憧れの宮崎大学に入学するも人間関係のストレスから再三パニックを起こし中退。その後、宮崎学園短期大学音楽科で恩師となる田中幸子先生と出会い、自分の心を音楽で表現できるようになります。

たくさんの試練をのりこえてきたあすかさんの奏でるやさしいピアノの音色は多くの人に感動を与えています。二〇〇六年、第十二回宮日音楽コンクールでのグランプリをはじめ多くの賞を受賞。二〇一五年五月、両親とともに初のCDブックを上梓し、テレビや新聞でも取り上げられ大反響をよびました。

昨年六月、音楽、演劇界の明日を担う人材などに授与される「岩谷時子賞奨励賞」を受賞されました。

### 家族で悩んだ日々

恭子さん(写真下)の講演では、



●発達障がいと診断されるまでの家族の苦勞やあすかさんの苦惱、葛藤。

●「解離性障がい(広汎性発達障がいの二次障害)が原因でいじめ、転校、退学、そして自傷、パニック、右下肢不自由、左耳感音難聴等で入院を繰り返した日々。

●障がいの特性を知ること、娘の行動が理解でき、向き合えるようになったこと。  
●運命の恩師との出会いで、あすかさんが自分の心を音楽で表現できるようになったこと。

等々、娘への謝罪と周りの人々への感謝を切々と語られました。

あすかさんのコンサートは、久石譲作曲の爽やかな曲で始まり、自らが作詞・作曲した「手紙」小さいころの私へ」では、手話を交え、美しい歌声を披露しました。最後のショパン作曲「幻想即興曲」では会場中が魅了される素晴らしい演奏に、感動の拍手が鳴り止みませんでした。

恭子さんの語りとおすかさんの演奏に勇気と感動をもらった九十分でした。

### ※解離性障がいとは

自分が自分であるという感覚が失われている状態。たとえば過去の記憶の一部が抜け落ちる、知覚の一部を感じなくなる、感情の麻痺などが起こる。原因としてストレスや心的外傷が関係しているといわれる。  
(厚生労働省HPより)

### 参加者の声

●あすかさんのおかげで最高に幸せな一日になりました。私の息子にも障がいがありますが、ピアノが大好きで十五年間続けています。これからの活躍を心よりお祈りします。

●お母様の講演は、あすかさんへの愛情と障がいに気づいてやれなかったことへの後悔などが本心に強く伝わった。演奏もすばらしかった。つらい思いから解放された強さや愛にあふれていた。

●「発達障がい」。同じ立場、同じ気持ちになった人間として共感し感動を沢山もらえました。私も私の目標を大切に頑張つて生きていきます。素直で素敵な音色にひかれました。かわいらしいあすかさんが輝いて見えました。

## 平成29年度 福岡市人権尊重週間入選作品

城南区の皆さんの標語とポスターの入選作品を紹介します。



別府小・4年 宮本 結衣さん

いじめから  
助けるヒーロー 俺はなる  
— 梅林中・1年 梅村 寛亮さん

「まあいっか」  
あの子にとっては イヤ 良くない  
— 鳥飼小・6年 杉原 宙歩さん

いじめはね  
見るだけでは 終わらない  
— 七隈小・5年 佐藤 孝治さん

せなかおす  
その手で進める 人がいる  
— 七隈小・5年 山内 壮真さん



城南小・3年 佐藤 詩さん



城南小・3年 田中 陽葉さん



城南小・3年 野口 そらさん



南片江小・1年 添田 千歳さん



城南中・2年 桑野 絹彩さん



梅林中・2年 鶴丸 あみなさん

## 平成29年度 城南区人権啓発連絡会議の活動

### 活動内容

6/29 ◆総会  
・役員の選出  
・平成28年度事業報告  
・平成29年度事業計画  
◆委員研修会  
・「人権立法の意義と教育・啓発の課題」  
谷口 研二さん(福岡県人権研究所 事務長)

7/13 ◆城南区人権を考えるつどい  
・「～どうしてまわりとうまくいかないの？～  
発達障がいのピアノニストからの手紙」  
野田 あすかさん(歌・ピアノ)  
野田 恭子さん(講演)

9/26 ◆第1回運営委員会  
・人権尊重週間(街頭啓発)の取組み  
・「城南区人権を考えるつどい」の開催報告

11/28 ◆人権尊重週間街頭啓発  
※詳細は裏面に記載

12/9 ◆人権を尊重する市民の集い  
※詳細は裏面に記載  
・実践報告  
「地域で子どもをはぐくもう」  
中村 みどりさん(NPO法人キーアセット)  
菅 祐子さん(福岡市養育里親)  
・講演「赤ちゃんポストは、それでも必要です  
～子どもは未来の宝物～」  
田尻 由貴子さん(スタディライブ熊本特別顧問)

2/5 ◆第2回運営委員会  
・平成30年度総会に付議する事項について  
・広報紙「こころ」の発行について

3/15 ◆広報紙発行  
・城南区人権啓発連絡会議だより  
「こころ」第28号発行(区内全戸配布)

### 総会・委員研修会

城南区人権啓発連絡会議の総会が六月二十九日(木)城南市民センターで開催されました。役員の選出、平成二十八年度の事業報告、二十九年年度の事業計画を審議し、それぞれ承認されました。

障害者差別解消法(平成二十八年四月)、ヘイトスピーチ解消法(平成二十八年六月)、部落差別解消推進法(平成二十八年十二月)等、相次いで人権に関する法律が施行されましたが、これらの法律を実のあるものにするためには、地域や会社で人権について考えるときに陥りがちな「たいしたこと、ないんじゃない」「みんなそうしているから私も」「あの時は仕方なかった」など、

考えることをあきらめて、「判断せずに責任を回避しようとする習慣」を変える必要がある、と話されました。  
日ごろから考えて行動する大切さは人権問題だけでなく防災にもつながる、何かあったときすぐに相談できるシステムや人間関係を地域で作ることが行動につながる、等のお話に、幅広い課題に気づかされた有意義な研修でした。

# 第46回 人権を尊重する市民の集い

平成二十九年十二月九日(土)、城南市民センターで開催

## 講演会

### 赤ちゃんポストは、それでも必要です 子どもは未来の宝物

スタディライフ熊本名誉顧問 田尻 由貴子さん



温かい語り口の田尻さん

当日は肌寒い空のもと、三百人を超える方が参加されました。第一部の実践報告では、「地域で子どもをはぐくもう」と題して、里親制度の内容紹介や取り組みと、実際の体験談をNPO法人キアアセットの中村みどりさんと福岡市養育里親の菅祐子さんが講演されました。続く第二部で、「赤ちゃんポストは、それでも必要です」子どもは未来の宝物」をテーマに、スタディライフ熊本特別顧問の田尻由貴子さんの講演が行われました。

第二部講師の田尻さんは、平成十二年より熊本県の慈恵病院看護部長として勤務され、平成十九年、「こうのとりのゆりかご(マスコミで『赤ちゃんポスト』と報道)」の設立に尽力されました。予期せぬ妊娠や望まない妊娠等で子どもを遺棄するような痛ましい事件が多発していた当時の日本。「救える命があるなら救いたい」「遺棄されてしまった赤ちゃんの命を救いたい」という熱い思いで開設にこぎつけました。以前に、視察に赴いたドイツでベビークラッペ(赤ちゃんの扉)など社会全体で命を守ろうと取り組む姿に影響を受けたことも設立のきっかけになったそうです。

日本では前例がなかったこともあり、行政等の関係者とも話し合いを重ねながら、ようやく三つの条件つきで開設が認められました。一つ、子どもが預けられたら市と警察に通報する。二つ、安全の十分な確保。そして三つ目は相談機能の強化です。現在、二年三百六十五日、無料で妊娠中の女性たちの電話相談を受けています。相談は県外からが八十三%。相談者の約半数が二十代、二割は二十歳未満で中学生や高校生も含まれていました。未婚や貧困、パートナーの理解不足等で誰にも相談できずに人知れず子どもを出産し、ゆりかごに連れてくる女性がほとんどです。

妊娠初期段階から相談に乗ることができれば、遺棄や虐待から子どもを守ることができるのではないかと心を寄せます。

「自業自得だ」と親を責めても問題は解決しません。親身に寄り添い、これからどうするかを一緒に話し合っていくことが大事なのです。

取り組みも十年目を迎え、その間百三十人の尊い命が救われました。その九割は自宅のふる場や来院途中の車中で産まれました。熊本県内から来られたのは一割未満。九州では福岡からが多く、遠くは北海道からも来られたそう。

誰にも相談できない社会が一番の問題、と田尻さん。相談件数については千五百件程度で推移していたものが、平成二十五年に一気に四千件を超えました。テレビドラマ放映の影響で認知度が高まったことが原因で、相談場所がいかに必要かを物語っている、と話しています。

相談を受けるときは、「聴く」「共感する」「親身となる」「寄り添う」「相手を決して責めない」という五原則をしっかりと守るといふ田尻さんです。

子どもは家庭環境のなかで乳幼児期を過ごすことが重要視されている昨今、ようやく日本でも里親への子どもの委託率を現在の十七・五%から七年かけて七十%にするという目標を国が掲げるようになりました。

人は人として生まれ、育てられて人間になります。愛情をたくさん注がれることで自尊心も高まります。それは、産んだ母親だけがすることでしょうか？近所のおじちゃんおばちゃんなどの温かい見守りも大いに大切なものです。社会全体で子どもを育てていきたいですね、と講演をしめくくりました。



## 地域で子どもをはぐくもう

### ～里親制度への取り組みと体験談～

#### 実践報告

NPO法人キアアセット スーパーバイザーソーシャルワーカー 中村みどりさん

皆さん、里親ってどんなイメージを抱いていますか？社会的養護とは何でしょうか？

日本で様々な事情で親と離れて暮らしている子どもは約四万六千人、福岡市に約四百人います。家庭養護と施設養護に分かれます。家庭養護の中には、養子縁組里親、一定期間育てる養育里親、そして五・六名の子とも暮らすファミリーホーム等があります。里親になるための要件は、心身ともに子どもの養育が可能なこと、生活困窮していないこと、などいくつかあります。キアアセットでは養育里親の開拓から支援までを行っています。生まれ育った地域社会で子どもを育てていくために私たちにできることは、いつも自問自答しています。



左:菅さん 右:中村さん

福岡市養育里親 菅祐子さん

私の家では、二人の娘が大学進学のため県外に出たことを契機に、里親に申込みをしました。現在小学生の姉弟を育てていて、一緒に暮らして六年目になります。二人とも当初は人に対する警戒感が強かったり、人に甘えることが苦手だったり、赤ちゃん返りをしました。それは周りの人に大切にされた経験がなかったため、自尊心が低かったのだと思っています。私たち夫婦は自分たちにできること、すなわち愛情をたっぷり注ぐと考える実行しました。子どもたちも頑張ったと思います。とてもかわいい子どもに育ってくれました。今思うことは、子育ては産んだ親だけでなく周りの皆で育てていくことが必要ではないかということです。



#### 参加者の声

●里親制度について実感がよくわかりました。ありがとうございました。●菅さんの体験談、感動しました。いつか私も里親になったらと思います。

#### 参加者の声

- 感激しました。命のバトンでの出産シーンは思わず涙。命の大切さをしっかりと伝えていきます。
- 里親制度について大変良い勉強になりました。また興味ももちました。
- このような集いがあることをもっと多くの人に知ってもらいたい。特に若い世代に。
- 福岡の大学に通っています。講演それから実践報告の話とてもためになりました。特別養子縁組や産後うつの話、もっと聞きたいと思いました。

#### 街頭で参加を呼びかけ

市民の集いに先立ち、十二月二十八日(火)に、城南区役所・地下鉄別府駅・中村学園大学周辺と、城南市民センター・福岡大学周辺の二会場に分かれて街頭啓発活動を行いました。

城南区人権啓発連絡会議の委員など三十九名が、学生や通行人にチラシを配りながら福岡市人権尊重週間(十二月四日・十日)の周知や「人権を尊重する市民の集い(城南市民センター)への参加を呼びかけました。



#### 編集後記

「こころ」第二十八号をお届けします。年一回の発行の城南区人権啓発連絡会議だよりですが、人権について考えるきっかけとなり、一人でも多くの人に人権尊重の輪が広がって、幸せな家族が増えることを願っています。十二月の「市民の集い」の後、里親の研修を受け始めた方が四組いらつしやるそうです。これがきっかけになれたのなら、とても嬉しく思います。

